



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

21

ハーディ

テ ス 阿部知二訳

中央公論社

ハーディ

訳者 阿部 知二

昭和44年5月1日初版印刷

昭和44年5月10日初版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

テ

年 解
譜 説

ス

目
次

505

486

3

トマス・ハーディによって忠実に描かる

テ
ス

——純真な女——

哀れにも傷ついた名よ！

わが胸を寝台としておまえを宿してあげよう。

シェイクスピア

初版への注解的覚書

つぎに述べる物語のおもな部分は——書き替えたところもすこしあるが——『グラフィック』紙にのせられ、ほかの諸章は、とくに大人の読者たちに向けて書かれたものとして、『フォートナイトリー・レビュー』と『ナショナル・オヴザーヴァー』とに、挿話的な小品としてのせられた。ここにこの小説の幹と枝々をつなぎあわせ、二年前に書かれた元の形どおりに、完全なものとして出版できるようにしたのであるが、そのことに対して、それらの定期刊行物の編集者と経営者と共に感謝を呈する。

ただつけ加えておきたいことは、この物語を世に送ります目的は、偽りない事実の継起を芸術的な形で表現しようとする試みという以外の何ものでもないということである。また、本書に含まれている思想や感情について言うならば、今日ではだれでも考えたり感じたりしていることがここで口にされていることに、あまりにも高雅

な読者諸氏が耐えられないとするならば、そうした人々には、聖ジェローム（四、五世紀ごろ東ヨーロッパにいた熱心なキリスト教徒。聖書の注解などの著作がある）のつぎのような使い古された言葉を思い出すことをおすすめしたい。たとえ、真実から不快がもたらされようとも、真実が隠されるよりは、不快がもたらされるほうがまさっている、と。

T・H・

一八九一年十一月

第五版およびそれ以後の版への序文

この小説の中で女主人公が経験する一つの出来事は、通常の作品の中であらば、中心人物としての彼女の役割にとつて致命的なものとして、または少なくとも彼女の意図するところや希望の決定的な破局として扱われてきたものであるが、この小説では、その出来事のあとにおいて彼女の偉大な戦いがはじまるのである。それゆえ、世の人々がこの本を歓迎するであらうこと、そして、世によくある災厄（さいやく）の、つねにおおい隠される側面について、

従来語られてきた以上の何かが小説の中では語られるべきだという私の主張に同意するであらうことは、通常の

習わしにまったく相反することではなかったらう。しかし、『ダーバーヴィル家のテス』がイギリスおよびアメリカの読者から共感的に受け入れられたことからすれば、物語をただ口やかましい社会の公式に規格どおりに同調させずに、声なき意見の方向に置こうとした企図は、たとえそれが、このようにがたびしとして不完全な出来映えで提供されたとしても、まったくまちがったものではなかったということを証明しているように思われる。こうした共感に対して、私は感謝を表せずにはいられない。この世の中では、人は友情を渴望しても空しいということがはなはだ多く、故意に誤解されないことだけでも親切と感じられるほどなのであるから、私がそれらの目の高い男女の読者と親しく顔をあわせて握手をかわすことがついにないだろうということは、残念である。

それらの人々の中には、この物語をきわめて寛大に歡迎した批評家たち——圧倒的多数の批評家たち——が含まれているのである。彼らの言葉からわかるのだが、彼らは、ほかの人々と同じように、私の叙述のもろもろの欠陥を、彼ら自身の想像的な直観であまりにも寛大に補

うことをしたのであった。

しかしながら、この小説の意図するところは、教訓的であることでも何かを押しつけることでもなく、描写の部分ではただ再現的であることであり、思念の部分では何らかの信条よりも、むしろ印象が書きこまれていることが多いのであるが、素材に対しても表現に対しても、異議をとなえる人々がひきつづき存在している。

これらのうちでも比較的きびしい人々は、とりわけ、芸術にふさわしい主題とは何かという点で、良心上からして意見が異なると主張し、この小説の副題の形容詞の觀念は、文明の約束事からそれに付加された人為的で、末梢的な意味以外の何ものとも結びつけないことを告白しているのである。彼らは、この語を、ほかならぬキリスト教的信条の、もっともうるわしい面からみちびきだされるべき精神によって解釈することができぬばかりでなく、「自然」におけるこの語の意味を、この語に付与すべきあらゆる美的意識ともどもに、無視する。ほかの人々は、この小説が体現している人生観は、十九世紀末に抬頭したものであって、もっと初期の、もっと単純な世代のものではないという断定によって——私としては、その断定が十分に理由のあることを切に望むものである

が——根本的にはただそれだけのことによって、異議をとなえているのである。くりかえして述べるならば、小説とは印象であつて議論ではなく、問題はそれで決着としなければならぬのである。シラーがゲーテにあてた手紙の中で、この種の審判者について述べている一節から思い出されるとおりである。「彼らは、表現されたものの中に自己自身のいづく諸觀念のみを求め、現にあるものよりもあるべきものを高く評価します。したがって、論争の原因は、第一原理そのものの中に存在しているわけですから、彼らと諒解に達することは不可能なのです」そしてまた、「私は、だれかが詩的な表現を評価するにあたって、内的な『必然性』や『真実』よりも、何かほかのものをさらに重要視していることに気づくと同時に、その人を相手にすることをやめてしまします」

私は、初版への注解的覚書の中で、この本のページに書かれた、あれこれのことに耐えられないような高雅な人があらわれるかもしれないことをほのめかした。はたして、そのような人が、上述の反対者たちの中にまじつて、あらわれた。ある場合には、彼はこの本を通読しようとして三度もはたせなかったことを、何と考えていいかわからなかったというのである。それというのも、

「かかる女も救済されうることを明らかにするための」唯一の道であるところの批判の努力を、私がふるわなかつたからなのだとするのである。またある場合には、彼は、悪魔の熊手くまてとか、下宿屋の肉切り用大型ナイフとか、恥ずかしいおこないであがなわれたバラソルとかいうような俗悪な品物が、れっきとした物語の中に姿をあらわすことに反撥した。そしてまたある場所では、この紳士は「不滅の神々」について不敬な文句が用いられたことにいつそう深く遺憾の意を表するために、三十分ばかりキリスト教徒になつた。もつとも、彼は、それと同じ生来の育ちのよさのせいで、著者について「彼としては、もつぱら自己の最良のものをわれわれに提供しているのだ」と、著者を弁解してくれているが、このお情け深い言葉には感謝をささげるほかはない。この偉大な批評家は、単数形だろうと複数形だろうと神をみだりに非難するということは、私をはじめて犯した罪だと想像しているらしいが、そのようなことはない、と私は彼に保証することができる。もつとも、これには、いくらか地方的な伝統があるかもしれない。ただし、シェイクスピアはおそらく歴史の權威ではあるまいが、もしそうだったとすれば、私はこうした罪がはやくも七王国（五）九世紀ころの南イングラン

『サドの王国』のころからウエセックスに持ちこまれていたということを証明できる。『リア王』の中で、この国の王グロスター、別名イーナ（ウエセックスの王。六六八―七二六？）はつぎのように言っている。

われわれは、神々に対しては、とんぼがいたずらっ子に対するも同じこと。神々は、なぐさみにわれわれを殺すのだから（『シェイクスピア』「リ」
（ア王）四幕一場）

『テス』を料理した人々のうち、残りの二、三のものは、たいていの作家や読者が喜んで忘れたがるような、まえてもってわかりきった種類に属していた。つまり、よき時とばかり独断を下す自称文学的拳闘家とか、現代において「異教徒に鉄槌を下すもの」（『聖アウグスティヌス』）とかであり、それから札つきの「水さし男」であり、彼らは、試行的な半成功のちに完全な成功になるのを妨げようといつも見張っていて、明白な意味を曲解したり、遠大な歴史的方法を適用するという名のもとに、個人的に偏向にふける。しかしながら、彼らにも提唱すべき主義主張があり、守るべき特権があり、存続させるべき伝統があるかもしれない。単なる物語作者としては、世間のもの

ごとにどれほど心をうたれたかを書きしるすわけであるから、そうした主義主張、特権、伝統のうちの あるものを、べつになんら深い意図もなしに見落としてしまったこともあろうし、およそ攻撃的な気分などないのに、まったくの不注意から、それらに衝突したこともあるかもしれない。ふと心をかすめた考えとか、ひとときの夢から生じた思いとかであっても、もし人が、それに従っておおっぴらに行動するということになる、そのようにして攻撃する者と、地位、利害、家族、使用人、牡牛、ろば、隣人、隣人の妻などとの関係において、はなはだ重大な不祥事が起こるだろう。したがって、彼は勇敢にも自己の本体を出版業者の鎧戸のうしろに隠して、「恥を知れ！」と叫ぶのである。世間ははなはだ密にこみあっている、で、ちよつとでも体の位置を變動させれば、それがきわめて正当な前進であつても、そのせいでだれかのかかとのあかぎれを踏む（『だれかのかかと云々はシェイクスピア』「ハムレット」五幕一場による）。そして、そうした變動はしばしば感情の中で生まれ、そうした感情はときとして小説の中で生まれる。

一八九二年七月

まゑに掲げた言葉はこの物語が発表されてまもないうちに書かれたものであるが、そのころには、この物語の諸点についての公私の活発な批判が、まだ感情を波立たせていたのであった。それらのページは、かつて表白されたこととして、その価値については問わぬこととして、

存続することを許すことにするが、いまならば、おそらくあのようなことは書かれなかったであらう。この本が出版されてから短い年月しか経過していないが、そのあいだにさえ、あのような返答を挑発した批評家たちのある者は、まるで彼らの言い分もわたしの言い分も、ともにきわめて取るに足りなかったことを、人に思い知らせるかのよう、「音なきところへくだって」(旧約聖書「詩篇」一一五篇)といった。

一八九五年一月

この小説の現在の版には、以前のどの版にもかつてのつたことのないページが二、三含まれている。それらのページは、元原稿にははいっていたのだが、別々に発

表された挿話的作品が、一八九一年版の序文で述べたようにまとめられたときに、見落とされたのである。それらのページは、第十章にでてくる。

まゑに言及した副題についてつけ加えておきたいのだが、あの副題は、ある偏見なき心の中に銘された、女主人公の性格についての評価——だれひとり異議をととなえそうもないような評価——として、最後の校正を読みおえたのち、最後の瞬間に付加されたのである。それが、この本の中にある他のどんなことよりも多く物議をかもしたのだった。Melius fuerat non scribere. (ラテン語の「ないほうがよい」の意)しかし、それはそのまま残っている。

この小説は、一八九一年十一月に、三巻本として、はじめて完本として出版されたのである。

T・H・

一九一二年三月



第一段 処女

一

五月なかば過ぎのある午後、初老に近い男がひとり、シャストンから、そのはずれにつづくブレイクモア、またの名ブラックムーアの谷あいにある、マールロット村のわが家へ向けて歩いていった。彼の体を支える両足はよろづいていて、歩き方に一種のくせがあるために、進む方向が直線にはならず、やや左へかたよるのだった。ときどき彼は、何かの思いに、わが意を得たというように勢いよくうなずいたが、とくに何を考えているというわけでもなかった。片腕には、からっぽの鶏卵籠かじょうがつるされていた。帽子のラシャ地はけばだって、ぬぐうときに親指が当たるつばの一個所は、すっかりすり切れていた。やがて彼は、ひとりのかなり年配の牧師が、韋毛わげの馬にまたがって、とりとめもない曲を鼻声で歌いながらくる

のに出会った。

「今晚は、だんな」籠を持った男は言った。

「今晚は、ジョン卿」牧師は言った。

歩いている男は、さらに一、二歩進んでから、立ち止まって振り向いた。

「ときにだんな、ちよつとうかがいたいんでして。このまえ市の立つた日にも、いまくらの時間に、この道でお目にかかったですが、わしが『今晚は』と申し上げたら、だんなは、いまと同じに『今晚は、ジョン卿』と言われましたな」

「そうだったな」牧師は言った。

「それから、そのまえにも一度——一月近くまえのことだけど」

「そう言ったでもあろう」

「じゃあ、そんなにたびたび、わしを『ジョン卿』と呼ばれるのは、どういうおつもりなんですか。わしは、しがない行商人のジャック・ダーベイフィールドだといふのに」

牧師は、馬を一、二歩近寄せた。

「ほんのわたしの気まぐれでしかなかった」彼は言った。そして一瞬ためらったのち、「それというのが、この州

の歴史をあらたに調べるために系図をあれこれとあさっているうちに、すこしまえのこと、ある発見をしたのです。わたしは、スタッグフット・レインの牧師トリンガムで、古いことに興味があるのだ。ダーベイフィールドさん、あなたは、自分が騎士の血をひく旧家ダーバーヴィルの直系の子孫だということを、ほんとうに知らないのかな。この家は、征服王ウィリアム(一〇六六年にイギ)とともにノルマンディからわたってきた、あの高名の騎士ペイガン・ダーバーヴィルから発しているということ、バトル寺院(ウィリアム王が建立した寺院)古文書に見えているがね」
「そんなことは、聞いたためしがありませんわ、だな！」

「ところが、それが事実だ。顎あごをすこし突きあげてみなさい。横顔がもっとよくわかるようにな。そう、これはダーバーヴィル家独特の鼻と顎だ——いささかくずれてはおるが。あんたの先祖は、ノルマンディのエストルマヴィラの殿がグラモーガンシアを征服するのに力を貸した、十二人の騎士のひとりであった。あんたの一族のあれこれの分家は、イングランドのこの地方一帯に、荘園を持っていた。それらの名前は、ステイーヴン王(一〇九七—一一〇九)時代の国庫年記に見えている。ジョン王(一二六六—一二七二)

のご治世には、ある分家なぞ慈善騎士団へ荘園を寄付したほどゆたかだった。それから、エドワード二世(一二七二—一二九七)の時代には、あんたの先祖のブライアンが、ウェストミンスターに招かれて、そこでの大評議会に列席した。オリヴァー・クロムウェル(十七世紀、清教徒革命を起こした)の時代には、あんたの一族もすこし衰えたが、そうひどいというほどではなかった。そして、チャールズ二世(一六三〇—一六八五)のご治世には、忠誠のおかげで『王家の樞しの騎士』(王は戦いの陰で救われ、その記に叙せられた。そのとき樞の勳章をつくった)に叙せられた。そうとも、一族には、何代ものあいだ、ジョン卿の名がつづいた。だから、もし勳爵じゆうきやく士の位が准男爵じゆんなんしやくの位のように世襲だったら、というのは、じつのところ昔はそうで、勳爵士の位は父から子へ受け継がれたのだが、もしそういうことだったら、あんたも現にジョン卿になっていただろうに」
「まさか、そんなことが！」

「つまるところ」牧師は、きめつけるように乗馬用の鞭むちで自分の足をびしりとたたいて、結論を下した。「イングランドには二つとないくらいな家柄なのです」

「そんなたまたまことがあるもんだらうか」ダーベイフィールドは言った。「だのに、このわしときたら、まるで教区でもいちばんしがない人間みたいに、年中あつち

こつちとろろついていたんだ——ところで、わしのこの問題は、どのくらいいまえから世間に知れていたんですか、トリンガム牧師さま」

牧師は説明して、自分が知っているかぎりでは、そのことは世間の記憶からまったく消え去ってしまったているから、かけらほども人が知っていることはなからう、と言った。彼自身にしても、ここまで立ち入ることになったのは、ダーバーヴィル家の盛衰の跡をたどる仕事にたずさわっているうちに、去年の春のある日、ジョンの荷馬車にダービーフィールドという名が書かれているのを目にとめたからで、それからジョンの父や祖父について調査する気になって、ついにこの問題に關してはなんの疑いもなくなったのである。

「はじめのうち、わたしはあんたにこんな無用な話なぞ聞かせて気持をかき乱したりすまいと決めていた」と彼は言った。「ところが、われわれの心の衝動というものは、ときには思慮分別でおさえきれないほど強くなるものだ。それにわたしは、あんたがたぶん、このことについていくらかは、以前からずっと知っていたのだろうと思っていた」

「まあ、じつをいえば、わしの家も、ブラックムーアに

くる以前には、もつとよい目も見たってことは、一度か二度聞いてました。ですが、そうは言っても、うちでいま馬を一頭持つてるとこを、昔は二頭持つてたぐらいなことだと思つて、まるで気にもとめなかったんで。家には、古い銀の匙と、古い彫り物の印形いんぎようもあります。ですがね、いったい、匙や印形がなんだというんですかな。……ところが、わしとあの身分の高いダーバーヴィル家とが、はじめっからずっと、一つの血筋だったなんて、あきれたもんですわい。わしのひいじいさんは、何か隠していることがあったとかいうことで、どこの出だかしやべりたがらなかったそうですが。……だが、牧師さま、あつかましくお聞きしてよろしければ、わしらの一門は、いまだどこかまどの煙をたててますか。つまり、わしらのダーバーヴィル家は、どこに住んでるんですか」

「どこにも住んでいはしない。絶えてしまったのだ——州の家門としてはな」

「そいつは残念なことだ」

「そう——系図というものは、とかく曖昧曖昧なことをいうが、そのほうの言葉でいえば、男系の消滅で——つまり、衰えて落ちぶれてしまったのだ」

「じゃあ、一門は、どこに眠っておりますか」

「キングズビーア・サブ・グリーンヒルというところだ。地下の納骨堂に列をなして、パーベック（石材の産地）大理石の天蓋をいただいたおのれたちの像といっしょにな」

「で、屋敷や領地は、どこにありますかね」

「そういうものは、何もないのです」

「へえ？ 土地もないんで？」

「まったく。まえにも言ったように、昔は広大なものであった。あんたの一族は、たくさん分家を持っていたからな。この州には、あんたたちの領地が、キングズビーアに一つ、シャートンにも一つ、ミルポンドにも一つ、ラルステッドにも一つ、ウェルブリッジにも一つあったのだ」

「ところで、わしらは、いつかまた、元のような身分になりますか」

「さて——それはわたしにはわからんことだ！」

「では、わしはこの問題をどうしたものでしょうか、だんな」とダーベイフィールドは、ちよつと言葉をとぎらせてからたずねた。

「いや——何もすることはないよ、何もな。せいぜい、

『ああ、勇士たちは、ついに倒れた』（旧約聖書「サムエル記」下二章）と心に言い聞かせて、修養することだ。これは、郷土の史家

や系図学者にとつていくらか興味のある事実だというだけで、それ以上はなんの意味もない。この州の老百姓の中にも、あんたの家と同じくらいの名譽の家柄が数軒はある。では、ごめん」

「ですが、これをご縁にあともどりして、わしといっしょにビールを一杯いかがですか、トリンガム牧師さま？ ビュア・ドロップ亭じゃ、なかなかうまいビールをだしますで——もつとも、じつのところ、ロリヴァー亭ほどよくはないですがね」

「いや、ありがたいが——今晚はやめておこうよ、ダーベイフィールド。あんたは、もうたっぷりやっているね」牧師は、こうして話を打ち切ると、馬を進めてゆきながら、自分がこんな物好きな故事などを小出しにしたのは、分別が足りなかったのではないかと考えるのであった。

牧師が去ってしまうと、ダーベイフィールドは、深い思いにとらわれながら二、三步歩いたが、やがて道はたの草のはえた土手に腰をおろして、籠を前に置いた。二、三分すると、遠くにひとりの若者があらわれて、ダーベイフィールドがたどってきたと同じ方向を追ってくるのだった。ダーベイフィールドは、それを見ると、片手を